View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

『古今集』一四八番歌「唐紅のふりいでてぞなく」考 ： 紅花染色と和歌表現

著者	森田 直美
雑誌名	埼玉学園大学紀要．人間学部篇
巻	19
ページ	466(1)-455(12)
発行年	2019-12-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1354/00001268/

Creative Commons : 表示 - 非営利 - 改変禁止
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/deed.ja

『古今集』一四八番歌「唐紅のふりいでてぞなく」考

― 紅花染色と和歌表現 ―

森田直美

はじめに

染色の作業工程や染料の性質は、和歌の生成にどう生かされたのだろうか。[*1] それを推し量る一例として、平安期以降の和歌に散見する「紅のふりいづ」という表現を取り上げる。

後に詳述するが、「紅のふりいづ」に関する近現代の解釈は定まっておらず、注釈内容も曖昧なものが少なくない。その曖昧さの要因のひとつは、近現代の人々の染色や染料に関する知識や感覚の欠如だと思われる。

平安時代の人々にとって染色とは、重要、且つきわめて日常的な家事であった。よって、多くを語らなくとも、染色を踏まえた和歌表現を、実感を伴って理解し、味わうことができた。しかし、現代の私たちにとって、染色は非日常である。その工程や染料の性質を知ろうとしなければ、表現の趣旨を深く理解することはできない。

以上の問題意識のもと、「紅のふりいづ」とは、紅花染色におけるどのような工程を指し、それが和歌表現にどう反映されたのかを明確にすることが、本稿の主眼である。

「紅のふりいづ」に関する近現代の解釈と問題点

「紅のふりいづ」という表現の時代的に早い例として、以下の『古今集』所収歌が挙げられる。

思ひいづるときはの山の郭公唐紅のふりいでてぞなく
（古今・夏・一四八 よみ人しらず）

紅のふりいでつつ泣く涙には袂のみこそ色まさりけれ
（古今・恋二・五九八 貫之）

この二首に共通するのは、「声をあげる」の意の「ふりいづ」に、「紅」を詠み合わせていることである。一首目は、「唐紅のふりいでてぞなく」によって、ほととぎすが喀血するほど声を振り絞っている様子や、紅涙（血涙）を流している様子が想像される。[*2] 二首目の「紅のふりいでつつ泣く涙には」も、不遇な恋に嘆く人の紅涙を表現している。

このように、「紅のふりいづ」には喀血や紅涙を連想させる効果があるが、さらに紅花染色の一工程である「ふりいづ」も掛けて

（一）

いると見るのが、従来の一般的な解釈である。しかし、染色の「ふりいづ」が、実際どのような作業を指すのかという点について、近現代の解釈は二説に分かれている。以下、一首目の一四八番歌を基に、主要な注釈を確認したい。

解釈A　布を染液の中で振り動かして染める

・金子元臣氏『古今和歌集評釈[*3]**』**

その紅色を染める時に、紅の染汁に布帛を入れては、度々振り動かして色濃く染め付けるので、「ふり出て」の序詞となった。

・新編日本古典文学全集『古今和歌集[*4]**』**

「ふりいで」は染色する布を振り動かして色を出す意と、声をふりしぼる意とを言いかける。

・片桐洋一氏『古今和歌集全評釈[*5]**』**

ふり出づは、布を紅色に染める時に水の中で振って色を鮮やかにすることである。

金子氏は、「ふりいづ」とは、布を染料の中で振り動かすことと解説し、新編日本古典文学全集、片桐氏も、同様の見解を示している。

解釈B　紅の染料（色素）を水に振り出す

・『角川古語大辞典[*6]**』**

紅の染料を水に溶け出させる。紅色に染めるとき、紅を染み込ませた布の小片を水中で振って溶かし出し、その中に生地を漬けて染めることからいう（顕昭説）。

・新日本古典文学大系『古今和歌集[*7]**』**

真紅の色を水に振り出して染めるので「振る」を出す。

・『歌ことば歌枕大辞典[*8]**』**

紅を水に振り出して染めることから、「紅」とともに詠まれることが多い。

・『日本国語大辞典 第二版[*9]**』**

紅（べに）を水に振り出してものを染める。ふりず。

『角川古語大辞典』は、「ふりいづ」を「紅を染み込ませた布の小片を水中で振って色素を出す」こととし、末尾に顕昭説を採ったと明記している。続く三つの辞典・注釈も、「紅を水に振り出す」という内容で一致している。

解釈B(2)　固形の紅を水に溶かし出す

・窪田空穂氏『古今和歌集評釈[*10]**』**

「ふり出て」は二義があり、上からの続きは、結晶させてある染料を水に溶くことを「ふり出て」という意で続け、承ける方は声を高く出すことを「ふり出て」というので、それに転じたもの。

・小町谷照彦氏「思ひ出づるときはの山の郭公[*11]**」**

染料の「唐紅」に直接しているので、溶かし出す意の解釈を採ることにする。

窪田氏は、「結晶させてある染料を水に溶くこと」とし、小町谷氏もこれを支持している。これらの注釈は、「水に染料を出す」という意味では解釈Bに通じるが、固形の紅を絵の具のように溶くと考えている点がやや異なる。よって、解釈B（2）として別に

挙げた。

以上のように、紅花染色にかかわる「ふりいづ」の解釈は、「染める布を染料の中で振ること」と見る説と、「布の小片から紅染料を水に振り出すこと」と見る説に分かれ、定まっていない。さらに、掲出した諸説を概観すると、説明が不十分で、具体的な内容を把握しにくいものも少なくない。

やはり、「紅のふりいづ」を明確に理解するためには、声をあげて泣くことによる喀血・紅涙と、染色の「ふりいづ」とが、表現的にどう連関しているのかを詳述しなくてはならないだろう。その連関を考える上で、「ふりいづ」がどのような作業工程なのかを具体的に知る必要もある。以下、特にこの二点を視座として論を進める。

喀血・紅涙と紅花染色の「ふりいづ」

ではまず、喀血・紅涙と、紅花染色の「ふりいづ」が、どのような表現的連関性をもっているのかについて、前掲した『古今集』の二首をもとに検討したい。

『古今集』一四八番歌の「思ひいづる」は、「恋人を思う時」、あるいは、「昔のことを思い出すとき」とも解される。[12] そのいずれが妥当な解釈か、簡単には定めがたい。しかし無心に読めば、当歌の激しい慟哭にふさわしいのは、やはり懐旧の念よりも、不遇の恋であるように思われる。平安朝和歌において、紅涙（血涙）はもっぱら恋歌に用いられる語であった。[13] この点も勘案すると、やはり「思ひいづる」は恋に関わるものである可能性が高いのではないだろうか。そう措定すると、「あなたを想って感極まり、声を振り絞って泣いている」と伝えることが、この歌の趣意だと言える。そして、紅涙を流す人の姿が、常緑の常盤山を喀血によって紅に染めようかというほど声をふり絞って鳴くほととぎすに重ねられるのである。[14] やや説明的に現代語訳すれば、「あなたを想うと、私は、常盤山を喀血によって染めるがごとく声を絞って鳴くほととぎすのように、声をあげ、紅の涙を流しています」などとなるだろう。

また、五九八番歌も同様に、恋に泣く人の様子を、「紅のふりいづ」に絡めて詠み、紅涙を連想させる。そして、「私の袖の色だけが濃くなっていく」とし、あふれる涙の量や、紅涙の色の深さによって、悲嘆の極みを表現している。

他に、「紅のふりいづ」を詠む同時代の例として、次のような歌も挙げられる。[15]

秋深きもみぢの色の紅にふりいでてなく鹿の声かな
（躬恒・二五九）

秋の野は唐紅になりにけり鹿ふりいでてなきそめしより
（元真・一六九）

これらは、人事を絡ませない季節歌だが、野山の景と、鹿が鮮血を振り絞るほど声をあげて鳴く様子をあわせ詠む点は、前の『古今集』一四八歌に通じる。[16]

さて、ここまでに挙げてきた例をはじめ、平安期和歌における「紅のふりいづ」は、そのほとんどが、紅涙、または喀血を想起させる。そしてここで、紅涙や喀血がどのような状態かを改めて考えてみると、これらはいずれも体の外に血を放出する動きなのである。

前に、染色の「ふりいづ」に関する現代の注釈は、

解釈A　染める布を染料の中で振り、色を濃くすること

解釈B　布から紅染料を振り出すこと

の二説に分かれていることを確認した。A説とB説は、布に対する染料の働きが真逆である。すなわち、A説は布に染料を吸収・浸透させる作業であり、B説は染料を布から放出する作業と捉えられる。

紅涙や喀血と、染色作業との表現上の連関性を鑑みれば、イメージとして合致するのはB説ではないだろうか。喀血や紅涙に、ことさら染色を絡ませて表現するならば、言葉の上だけでなく、映像として相通じるものがあると考えた方が、より説得力がある。では、B説の「布から染料を振り出す」とは、具体的にどのような工程なのか。この点を明らかにしつつ、考えを掘り下げていきたい。

紅花染色における「ふりいづ」の実際

「ふりいづ」についてB説を採る『角川古語大辞典』（前掲）は、顕昭『古今集註』を参考とした旨を明記している。では以下に、その顕昭説を確認したい。顕昭は、『古今集』一四八番歌の「唐紅のふりいでて」について、次のように記している。[17]

私云、ふりでとは、ふでとて布のさいでを染めて、それををろして衣をば染むれば、ふりでとは言ふなり。

「布のさいで（裂帛／裂布）」とは、細かく切った布を指す。つまりここでは、細切れの布を「ふで」と称していることになる。[18]これと同様に、毘沙門堂本『古今集註』[19]にも、「紅のふりで」の注釈として、「紅のふりでと云は、紅をば布切に染つけてをく也。ふりでと云也。為武云、なま女房は是をただふでと云也。私に案之、金葉に紅ノ筆といへるも是なめり」と記した箇所がある。[20]

顕昭は、「ふで」と称されるこま切れの布を紅に染め、その「ふで」を「をろして衣をば染む」と言う。「をろす」とは、「布を水に浸けて、再び染料を放つ」ことを意味している。この工程について、以下、古代染色研究分野での説を確認したい。

前田千寸氏は、[21]紅花の保存について、「紅花は採取したまま長く貯蔵すれば紅色素が浸出しなくなるので、貯蔵の為には一首の加工を施さなくてはならない」とし、その加工法を数例挙げている。

例えば、紅花の花弁に水分を与え、よく衝いた上で団子状にまるめ、乾燥させる方法がある。これは「花餅」と呼ばれ、山形などで現在も行われている貯蔵法である。しかし、日本でこの加工が行われるようになったのは、おおよそ江戸時代以降と考えられている。[22]前田氏は他に、以下のような加工方法を挙げている。

綿、或いは麻屑に染めつけ、（中略）乾燥して貯蔵し、使用の時これに藁灰汁を加えて溶解させ、これに酢を加えて暫時放置すれば紅色を呈すると同時に沈殿を生ずる。その機を捕えて被染物を浸して、（中略）染めることも出来る。

ここに記されている、「紅を染め付けた綿や麻屑を乾燥させ、使用する際にここから染料を溶解させる」という内容は、顕昭説の言う「ふりで」に合致すると考えられる。顕昭は詳述していないが、前田氏の記すように、布から紅染料を戻す際には、真水ではなく藁灰汁の溶解液（藁の灰を水に浸し、漉した溶液）が使用される。[23]

（四）

さて、ここで気にかかるのは、顕昭の説く工程が、時代的にいつごろから行われていたのかという点である。一般的に染色作業の相伝は、口伝や経験則に拠るところが大きく、文献による確認は、時代を遡るほど難しい。たとえば、『延喜式』縫殿寮雑染用度条には、各色彩の染色に必要な材料と分量が記されるのみで、詳しい作業工程は示されていない。しかし、前掲した顕昭『古今集註』の他、中世期の『古今集』注釈には、少なからず以下のような記述が確認できる。[24]

・**藤原定家『顕註密勘』**

唐紅のふりでゝぞなくとは、紅にふりでと云事のあればそへてよむ也。或人云、ふりでとは紅の濃き色也。常には紅をおろして白布にそめたるをば、ふりでといふ。それを申す。

・**『古今集素伝懐中抄』**

からくれなゐのふりいでゝとは、くれなゐを布切に染をきて、物色をそむるをり、彼ぬのゝきれをふればいろのいづるなり。仍からくれなゐのふりいでゝとはよめるなり。

・**飛鳥井雅俊『古今栄雅抄』**

紅を布に染め付て、おろして染る時ふりだすものなれば、ふり出てぞ鳴とほとゝぎすによせたり。

以上の注釈は、いずれも「唐紅のふりいでて」について、概ね同様のことを述べている。たとえば、『素伝懐中抄』の波線部は、「紅を布切れに染めておいて、染色の際に、その布切れを（水の中で）振ると色が出る」という解説である。また、最後に挙げた『栄雅抄』の波線部は、やや言葉足らずだが、他の古注を参考に補えば、「布に染めつけておいた紅を水に戻す時、布から振り出すので」と読める。これらと顕昭説から、「ふりで」の工程は、少なくとも平安後期から鎌倉・室町期あたりには行われ、一般によく知られていたと考えて差し支えないだろう。

では、「紅のふりいづ」という表現が確認され始める、平安前期はどうだろうか。中世以前の、上代・中古期については、この作業について直接言及した文献が確認できないため、間接的な情報によって推測したい。

たとえば、次の『古今集』に見える貫之の歌は、平安前期において、紅染料を灰汁で戻す作業がよく知られていた証左となる。

紅に染めし心もたのまれず人をあくにはうつるてふなり

（古今・雑体・一〇四四 貫之）

当歌は、「あく」に「飽く」と「灰汁」とを掛け、藁灰などの灰汁に浸けると、紅に染め付けた衣から色素が抜けることを、恋人の心のうつろいに重ねている。[25] また、吉岡幸雄氏によれば、[26] 貯蔵用として紅で染めた麻布は『正倉院目録』にも見え、「烟子（えんじ）（烟支）」と記されるものがこれにあたる。このことから、布に染め付ける紅の保存方法、および、それを戻して染める工程は、既に奈良時代には行われていただろうと推察される。

以上から推測すると、顕昭の説いたB説の染色工程は、「紅のふりいづ」という表現が散見され始める平安前期にも行われていた可能性が高い。さらにB説の作業は、他の染料にはない紅花染色特有の工程である。この点は、A説、B説のいずれが妥当かを判断する上で、非常に重要である。「ふりいづ」が、前述したA説「布を染料の中で振ること」を指すならば、他のさまざまな色彩が「ふ

（五）

りいづ」と同時に詠まれる例を確認できてもよいだろう。しかし、染色を背景とする「ふりいづ」が詠まれる際、その色彩はもっぱら紅である。このことを鑑みると、これは紅花染色だけに特徴的な作業を指している可能性が高いと察せられる。よって、この点もB説の優位性を高めるひとつの要素となる。

また、B（2）説についても触れておきたい。前に、「ふりいづ」を、「結晶させた紅を水に溶くこと」とした注釈をB（2）説とした。たしかに紅花の染料を沈殿させ、凝固させた固形の紅は、化粧品や顔料として使用できることが知られる。しかし、一旦凝固させた紅で染液を作るという方法は、管見の限り見出すことができなかった。[27] よって、これを穏当な説と見ることは難しいと考える。

注釈が揺らぐ過程

さて、以上の検討から、紅花染色の「ふりいづ」は、B説「紅の染色工程において、一度こま切れの布に染めた紅の色素を、再度放出すること」と見るのが穏当だと結論したい。また、ここまでに挙げた諸注釈をはじめ、中世期の古注釈を概観すると、「紅のふりいづ」への見解は、概ねB説で一定している。では、その解釈は、いつごろから揺らぎ始めたのだろうか。

例えば、前掲した貫之歌の下句「人をあくにはうつるてふなり」（古今・雑体・一〇四四）のように、「紅を灰汁で戻す」ことを踏まえた歌は少なくない。中世期頃までは、コンスタントに用例を確認することができる。以下、その内の四首を例として挙げる。

題しらず　　よみ人しらず

かぎりなく思ひそめてし紅の人をあくにぞかへらざりける
（拾遺・恋五・九七八）

初恋

ふりいでて言ひそめつれば紅のあくけなくてもかへりぬるかな
（散木奇歌・一一七八）

紅の濃染の衣あくたれてまたことづまになにうつるらん
（新撰六帖・一三七〇「こと人をおもふ」）

新しき年の初雪の下

あくといふ色にうつらぬ山桜こや紅に染めぬ色なる
（雪玉・六八二）

しかし近世期に入ると用例数は減少し、広く詠まれる表現ではなくなっていったと推察される。[28] 以下、近世期のわずかな例から二首挙げる。

紅に染めし木の葉もあくた川流れてもとの色はとまらず
（林葉累塵・五九六・僧禅秀）

二月や八重咲く梅の紅にうたて灰さす野辺のあくた火
（藤簍冊子（秋成）・一一四二）

この用例数の変化から、近世期には、「紅のふりいづ」という表現への関心が薄らいでいった可能性が読み取れる。では、近世期の『古今集』注釈では、「紅のふりいづ」をどう捉えているだろうか。主要な書を数例確認したい。[29]

まず、契沖『余材抄』は、

常には紅をおろしてきぬにそめたるを、それをおろして又そむるをふりてといふと、顕註にかゝれたるを定家卿もさやうに聞侍りきと同心なり

と、顕昭説を引き、その説を定家も踏襲していたことを踏まえ、これに従う姿勢を見せている。また、北村季吟『古今集拾穂抄』は、「紅花を布などに染付てふり出す物也」とし、『後水尾院古今集聞書』にも、「ふりいでて鳴とは紅は物に染付てをきて、ふり出しふり出し染る物なり」などとある。これらも中世期の諸注釈と同様である。

しかし、これらに対して賀茂真淵『古今和歌集打聴』には、次のように記されている。

紅を染めるには、絹を紅の汁に打入れて、或はよくもみ、或はいくらもよく振ごとに、色の染出るものゆゑにいへり

この注釈は「ふりいづ」を、「絹を紅の染液の中に入れて、揉んだり振ったりすること」と取っており、管見の限り、これが前述A説の初見である。おそらく、金子氏『評釋』は、この馬淵説に従ったものと思われる[30]。こうした記述から察するに、染色に関連する「ふりいづ」の実態が不明瞭になり、徐々に説が枝分かれしはじめたのは、近世中期以降と考えられる。そして近現代に至り、次第にA説を採る注釈が増えたことで、解釈が二説に分かれてしまったのだと察せられる。

おわりに

以上、紅花染色の「ふりいづ」とはどのような作業なのか検討し、これは「一度紅の染料を染み込ませた布から、再び色素を振り戻すこと」と見るのが穏当と論じてきた。また、染色工程において布から紅の色素を放つことと、紅涙・喀血といった、血液が体外に放出されることとのイメージ的な共通性にも触れた。さらに、染色の「ふりいづ」に関する見解は、中世期ごろまでの古注釈においては、ほぼ一致していたにもかかわらず、近世、近代、現代と時代が下るにつれ、次第に二つの説に枝分かれしてしまったという、注釈史上の問題も指摘した。すなわち、近世中期に「染料の中で布を振る」という説が浮上し、やや曖昧な形でこれに追従する注釈が増え、現代に至っているのである。

本稿冒頭部分の繰り返しとなるが、このような過程で注釈に揺らぎが生じた要因のひとつは、時代が下るにつれて、染色が日常風景ではなくなっていったことだと言える。実際、『古今集』一四八番歌「唐紅のふりいでてぞなく」を解釈するにあたり、小町谷照彦氏は[31]、「『顕註密勘』の言う「二度染める」という見解はいかがか」という考えを示している。しかし、紅花染色の実作業を知れば、「二度染める（一度紅に染めた布から、再び染液を作って別の布を染める）」という点こそ、「ふりいづ」の解説に不可欠なのだと理解できる。

今回扱った「紅のふりいづ」のように、古典文学作品の色彩・染色に関する研究史を概観すると、古注釈以来積み重ねられてきた成果が、近現代に至ってやや後退していると感じられることも、ままある[32]。そしてこのような事態は、色彩に関する場だけではなく、さまざまな面で起こっている可能性があるだろう。

古典文学作品がどのように生成されたのかを検討する際には、時代が下るとともに薄れてゆく感覚を、考えうる種々の方法によって繰り戻していくことが、やはり非常に重要である。現存する和歌の用例調査や、諸文献の精査を踏まえても、解決できない事例は多々ある。しかし、今回のテーマのように、納得のいく理

解にたどりつける場合も、おそらく少なくはないだろう。

［資料出典、その他］

・和歌はすべて新編国歌大観ＣＤ-ＲＯＭによるが、一部私に表記を改めた。
・諸注釈の出典は、注に記す。注釈本文は読解の便宜上、一部私に表記を改め、句読点を施した。また、引用本文中の傍線等は、すべて筆者による。

［注］

*1　拙稿「平安朝和歌の生成と染色・染料―『うつほ物語』の「紫」をめぐる贈答歌を中心として―」（小山利彦氏編著『王朝文学を彩る軌跡』所収、武蔵野書院二〇一四年）においても、同様の疑問を扱った。ここでは、『うつほ物語』の作中和歌を題材とし、和歌の表現生成に、紫草の染料としての特性や、染色の時季・工程が、どうかかわっているのかを論じている。

*2　工藤重矩氏は、『古今集』一四八番歌の「ふりいでて」は、「山から飛んで出て」と解釈すべきと論じられた（「古今集一四八「唐紅のふりいでてぞ鳴く」の解釈―和歌解釈の方法」（『文学・語学』第一〇三号、一九八四年十一月））。しかし赤羽学氏は、工藤氏が「唐紅に」の表現的機能についてほとんど触れていない点などに疑問を呈された。そして、「唐紅」の色のイメージと「声をふりしぼること」とが喀血を想起させるという、従来の説が妥当だと論じられている（「『古今集』一四八「唐紅のふりいでてぞ鳴く」の解釈私見」（『文学・語学』第一〇七号、一九八五年十一月））。本稿では、赤羽氏の論を穏当と考え、従来の説に従いたい。

*3　金子元臣氏『古今和歌集評釋』（明治書院一九二七年）。

*4　新編日本古典文学全集『古今和歌集』（小学館一九九四年）一四八番頭注。

*5　片桐洋一氏『古今和歌集全評釈』（講談社一九九八年）。ここに引用した片桐氏の注釈は、やや具体的な作業内容が掴みにくい。しかし、『古今集』五九八番歌について、「染料の溶液の中で布を激しく振って染めるので」と解説していることから、一四八番歌の注釈も解釈Ａに相当すると判断した。

*6　『角川古語大辞典』（角川書店一九八二年）。

*7　新日本古典文学大系『古今和歌集』（岩波書店一九八九年）一四八番脚注。

*8　『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店一九九九）。「ふりいづ」の執筆担当は廣井理加氏。

*9　『日本国語大辞典第二版』（小学館二〇〇〇年）。

*10　窪田空穂氏『古今和歌集評釈』（角川書店一九六五年）。

*11　小町谷照彦氏「思ひ出づるときはの山の郭公」（『国文学―解釈と教材の研究』巻三五―一二号、二〇〇二年十月）。

*12　近現代の主だった注釈では、竹岡正夫氏『古今和歌集全評釈』（右文書院一九七六年）、前掲注（5）片桐氏著書、前掲注（11）小町谷氏論が「懐旧の念」説を採り、前掲注（3）金子氏著書、前掲注（4）新編日本古典文学全集が「恋人を思う時」としている。

*13　紅涙（血涙）が、和歌においてはもっぱら悲恋に流す涙の形容として用いられていることは、拙稿「紅の涙と墨染の衣―『源氏物語』総角巻の描写をめぐって―」（『文学・語学』第一八四号、二〇〇六年三月）に詳述した。

*14　『古今集』一四八番歌が、「ほととぎすの喀血によって常盤山が染まる」という意をもつという点は、前掲注（12）の諸注釈などに示されている。

*15　藤岡忠美・徳原茂実両氏『躬恒集注釈』（貴重本刊行会二〇〇三年）では、二五九番歌の「紅のふりいでてなく」を、「声をはりあげるの意と、紅色の染料を水にとかして衣を染めるの意を掛ける」と解説している。

これは前述B説、あるいはB（2）説にあたる。また、本文に引用した類例の他、『大和物語』にも、「鹿の音はいくらばかりの紅ぞふりいづるからに山の染むらん」（一二七段）が確認できる。新編日本古典文学全集『大和物語』の頭注では、「ふりいづる」を、「「声高く鳴く」意と「くれないを水にふり出して染める」という意の掛詞」としている。これは前述B説にあたる。

*16 「喀血が山の木々を染める」と表現するならば、ほととぎすを詠む『古今集』一四八番歌よりも、秋の紅葉と鹿を詠むこれらの歌の方が発想として自然である。翻せば、「夏にもかかわらず、ほととぎすが常盤山を染めるほど鳴く」と詠む点に、古今集歌の特色があると言えよう。

*17 『顕昭古今集註』（『続々群書類従第十五』所収、続群書類従完成会一九八四年）。

*18 顕昭は、「ふりで」に関する注釈として、本文中に引用した解説の後に、「染色に用いる「ふで」」に、「文章を書くための「筆」」の意を添えるとし、『顕註密勘』も同説を踏襲している。しかし、「ふりで」に筆記具の「筆」に重ねて詠んだという注釈部分は、従いがたいものと考える。後代の古注釈、および近現代注釈も、この点は引き継いでいない。

*19 国文学研究資料館編『中世古今和歌集の世界―毘沙門堂本古今集注をひもとく』（勉誠出版二〇一八年）所収の翻刻に拠る。なお、同書所収、山本登朗氏「複合体としての『毘沙門堂本古今集注』―その性格と成立」は、『毘沙門堂本古今集注』がほぼ現在の形となったのは、鎌倉時代後期あたりと推定されている。

*20 確かに、毘沙門堂本『古今集註』が指摘した『金葉集』の例をはじめ、平安後期から中世・近世期の和歌には、少数ながら「紅のふで」を詠むものが確認できる。以下に三例を挙げる。

ふみそめて思ひかへりし紅のふでのすさみをいかで見せけん
（金葉二・恋上・三七三 内大臣家小大進）

人の消息したりける返事を、物かきけるふでのついでに朱にてかきてやれりければ、おしかへして、松の煙の色のくれなゐなるよしをいへりける返事に
墨の色の紅深く見えけるはふでをそめつつかけばなるらん
（続詞花・戯咲・九八〇 玄範聖人）

紅のよそなる色はしられねばふでにこそまづそめはじめつれ
（山家・一四九四）

従来、これらの歌の「紅のふで」は、「中国漢籍に見る彤管（女性が使う赤い筆）の訓読」、あるいは「恋文」の意とされ、紅花染色に絡めて解釈した近現代の注釈は、管見の限り見出せない。しかし、いずれの例にも「染む」という言葉が詠みこまれていることから察するに、紅花染色の場で使用される「ふで（ふりで）」が意識された可能性は高いのではないだろうか。また、『金葉集』の「ふみそめて（「染む」「初む」の掛詞）」や、『山家集』の「ふでにこそまづそめはじめつれ」などは、「紅花染色の際、ひとまずの段階で染める布」という認識の反映もうかがえる。この点からも、毘沙門堂本『古今集註』の指摘は看過しがたい。

以上のように、和歌における「紅のふで」の解釈については、更なる考察の余地があるが、その追究は本稿の本旨に逸れるため、別稿にて論じたい。

*21 前田千寸氏『日本色彩文化史』「第一章染色用植物」の「紅花」の項（岩波書店一九六〇年）。

*22 鈴木孝男氏「紅花餅と紅染の技法」（中江克己氏編『紅花染 花の生命を染めた布』所収、泰流社一九七八年）。

*23 紅花に含まれる紅色素は、アルカリ性溶液でなければ溶け出さない。よって、藁灰のアルカリ質を含んだ溶液を使用する。

*24 『顕註密勘』（日本古典文学影印叢刊22財団法人日本古典文学会。底本は中央大学図書館本）、『古今集素伝懐中抄』（日本古典文学影印叢刊22財団法人日本古典文学会。底本は東京大学文学部国語研究室蔵本）。『栄雅抄』は、前掲注（12）竹岡氏著書に掲載されている本文を引用。

*25　ただし、当歌の「あくにはうつる」に関して、従来の注釈は、ただ「灰汁で紅色が褪せる」とのみ記しているものが大勢を占めている。しかし、貫之が染色に事寄せて表現しようとしているのは、色が退色することだけなのだろうか。それだけではなく、灰汁によって抜いた紅を染料とし、また別の布を染めるという紅の染色工程を、恋人の心が自分から他者へと移り染まっていく様相に、巧みに呼応させているのではないか。染色の実態と重ね合わせると、当歌の理解は、より深まる可能性がある。この点については、別稿を期す。

*26　吉岡幸雄氏『日本の色を染める』（紫紅社二〇〇二年）。

*27　前掲注（21）前田氏、注（22）鈴木氏、注（26）吉岡氏に加え、上村六郎「『延喜式』の紅花染について」（『昭和版延喜染鑑』所収、岩波書店一九八六年）、山崎青樹氏「三世紀以前に中国より渡来した紅花」（『古代染色二千年の謎とその秘訣』所収、美術出版社二〇〇一年）などにも、固形の紅を溶かして染料を作る方法は確認できない。

*28　近世期には、紅花染色と灰汁を詠む歌の用例が少ないが、依然、灰汁を用いた紅花染色は行われている。上村六郎氏（前掲注（27））は、慶安四（一六五一）年に刊行された『万聞書秘伝書』（家事の指南書）を、紅の染色法を詳述した現存最古の書と位置づけている。その『万聞書秘伝書』にも、「灰汁をくらくらと沸かして、ぞく布へ一つかけ、絞り出だして、紅をまた余のぞく布へかくるなり」と、灰汁によって紅色素を抽出することが記されている。（『万聞書秘伝書』の本文は、京都女子大学図書館蔵本の紙焼き（国文学研究資料館、請求番号S548））による。

*29　近世期注釈の確認は、『古今和歌余材抄』（『古今集古注釈大成　古今和歌余材抄　古今集註　古今秘註抄』所収、日本図書センター一九七八年、底本は内閣文庫蔵本）、『古今拾穂抄』（古今集注釈書影印叢刊6　勉成出版二〇〇八年、底本は個人蔵本）、『後水尾院古今集聞書　上』（『古今集古注釈書集成』所収、笠間書院二〇〇九年）、『古今和歌集打聴』（『賀茂真淵全集』第九巻所収、続群書類従完成会一九七八年）による。

*30　前掲注（3）金子氏著書。なお、馬淵以降の近世期古注釈、本居宣長『遠鏡』や香川景樹『正義』などには、染色にかかわる「ふりいづ」への言及がない。近世期和歌における用例数の減少と考え合わせると、染色の「ふりいづ」に対する関心の低下も察せられる。

*31　前掲注（11）の小町谷氏論。

*32　拙稿「水は括られたのか―在原業平「唐紅に水くくるとは」の清濁―」（『都留文科大学研究紀要』第八九集、二〇一九年三月）でも、業平歌の注釈史に対して同様の指摘をした。

[付記]

本稿は和歌文学会二〇一五年五月例会（於 学習院大学）での口頭発表に基づく。席上で、貴重なご意見、ご教示を賜った諸先生方に厚く御礼申し上げる。また、執筆に際し、京都伏見・染司よしおかの工房で紅花染色の工程を実見する機会をいただき、吉岡幸雄氏より多くのご教示を賜ったことにも、格別の御礼を申し上げたい。

A Study on Poem No.148 in “Kokin waka shu”:

Staining a Safflower and Expressing Japanese Poetry

MORITA, Naomi

キーワード：古今集 148 番歌、紅花、染色
Key words ：“kokin waka shu” poem no.148, safflower, staining